

「ムーサに仕える輩たち」と後期ローマ帝国

——教養知識人と帝国・皇帝体制——

西村 昌 洋

【要約】 本稿は四世紀ローマ帝国における教養人のネットワークに焦点を当てることで、帝政後期の教養文化とローマ帝国との関連について論じる。四世紀のローマ帝国では、数多くの知識人が学業を修め帝国官僚として栄達を遂げるために国内を広範囲に移動していた。教養人は知人や後続のために互いに便宜を図り合っており、こうして形成された彼らの交流網は帝国規模に及ぶものだった。当時の教養が最も重んじたのは修辞学であり、修辞学の素養はエリートとしての人格陶冶に必須のものとみなされていたため、教養人と帝国官僚を同じ教養エリートとして統合する役割も果たしていた。一方、教養人は頌辞において、ローマ皇帝は過去の威信を現在に再現しローマの再生と永遠を約束する存在と繰り返し語っており、当時の教養文化には皇帝と帝国の存続を自明視するところがあったことがわかる。後期ローマの教養人たちは帝国の体制や理念と密接に結びついていたのである。

史林 一〇一卷一号 二〇一八年一月

はじめに

本稿では、ディオクレティアヌスの登位からローマ市略奪までの時期、およそ紀元後四世紀前後にあたる後期ローマ帝国の時代における教養文化と帝国との関係を、「学びのネットワーク」という観点から論じる。本論に入る前にまず、この時代を代表する知識人の一人、アウグステイヌスの経歴を概観することから始めたい。^① 三三四年、北アフリカのタガ

ステに生まれたアウグステイヌスは、一一歳でマダウロスの町で文法をはじめとする初歩的な教育を受けた後、親類縁者からの経済的援助を得て一七歳よりローマ帝国領北アフリカ最大の都市カルタゴにおいて修辞学の学習を始めた。三七四年、一度故郷のタガステに戻りしばらく当地で文法教師を務めた後にカルタゴへ戻り、修辞学の教師となったものの、三八三年、カルタゴにおいて八年近く修辞学の教師を務めていたアウグステイヌスは、北アフリカを離れイタリアの都ローマへ渡ることを決意した。アウグステイヌスはその決断について後に振り返ってこう語っている。

わたしがローマにこうと思ったのは、それをわたしにすすめた友人たちによって、大きな利得や高い地位が約束されたからではない。もつとも、こういうことも当時はわたしの心を動かしたであろう。しかし、最大のほとんど唯一といってもよい理由は、ローマの青年たちのほうがもつと静かに勉強し、もつと厳しい規律にしばられているので、自分のついてもいない教師の講義に、どこであろうとあつかましく押しかけてくるというようなこともなく、また教師の許可がなければそこにはいることもできないと聞いていたからである。これに反して、カルタゴでは、学生のあいだに、忌むべき常規を逸した放縦が行なわれていた。かれらはあつかましく乱入して、それぞれの教師が教え子たちのためを思って定めた規律をほとんど正気の沙汰とは思われぬ態度で乱していた。かれらは、慣習によって支持されなければ法律によって罰せられるべき多くの不正を働きながら、平然として恥じない。^②

残念ながら、ローマでアウグステイヌスが目にした学生たちもカルタゴの生徒と同程度あるいはそれ以上に態度が悪かったらしく、アウグステイヌスの期待は裏切られることになったが、ローマ滞在中のアウグステイヌスには転機が訪れた。三八四年、アウグステイヌスは友人の手を介して、ローマ市元老院議員にして当時ローマ市の都市長官を務めていたシュンマクスから推薦を得て、ミラノで修辞学教師のポストを得ることに成功したのである。この時のミラノは皇帝ウァレンティニアヌス二世の宮廷所在地であったため、ローマ帝国の政治権力中枢の一つだった。皇帝権力の膝下で修辞学教師の

職を得ることは、才能ある者や立身出世を志す野心家にとって大きな意味があった。実際、アウグステイヌス自身、そうした野心のあったことを明らかにしている。「実際、なにか名誉ある地位に就けるのも、もう少しではないか。……有力な友人が数多くいるのだから、なにもそれほどあわてなくても、少なくともプラエセス級属州総督になれるはずだ^④、と。だがアウグステイヌスにとってミラノは同市の司教アンブロシウスとの出会いの地となった。アウグステイヌスは世俗の世界で栄達を遂げることをあきらめ、三八七年、ミラノでアンブロシウスから洗礼を受け、翌年アフリカに戻り、三九一年にはヒッポ・レギウスで司祭に、三九五年には司教に叙任され、教会人として生きていくことになる。キリスト教思想家としてのアウグステイヌスの重要性については詳しく述べるまでもあるまい。

アウグステイヌスは子供時代に故郷の地で勉学に励み、二〇代の多くをカルタゴの教師として過ごし、三〇歳前にはさながら出世を求めてイタリアに渡航し、数年の間、官吏として採用される機会をうかがいつつ修辞学の教授を続けた。アウグステイヌスの海外滞在は五年ほどで終わったことになるが、これは四世紀当時、海を越えて学問に携わり、キャリアを重ね、文人たちと交流を重ねた教養人の遍歴の一例にすぎない。実際、後期ローマ帝国では、多くの人間が故郷を離れて勉学を続け、各地を移動しながら弁論や文学の教師として経歴を重ね、同じ文人たちのために便宜を図り合っているのである。彼らは皆、同じ古典作品を学習することで培われる教養文化を紐帯として結びついた教養エリート層であり、帝国規模で張り巡らされた彼らの活動と交流の広がりには、まさに「学びのネットワーク」と呼ぶにふさわしい。そしてこの「学びのネットワーク」は帝国の統治のネットワークとも密接な関わりがあった。教養エリート層は同時に帝国の官僚・行政官の予備軍でもあったからである。事実、修辞学教師から官僚や属州総督のような政治的なポストに転身した例は珍しいものではなく、ミラノ滞在時のアウグステイヌスが官吏登用の期待を抱いたのはきわめて自然なことだったのである。後期ローマ帝国は官僚機構が発達したことで知られるが、官僚として帝国統治に与る者は教養文化の薫陶を受けていなければならぬと考えられていた。属州シリアの都市アンティオキアの修辞学者リバニオスは、ある若者の教育について

語る書簡の中で、官僚としてふさわしい振舞いについてこう述べている。

これほどの官位にあっても、権力を前にして品位を失わず、諸都市が幸福であることを示すのを己が務めと考え、執行吏の剣が無用であることを喜び、建設事業によって町々を美しくし、ムーサの女神らに仕え、裁きの場にあつては不正を為した者を誰一人罰せぬままにはしない、これが知を愛すること以外の何でありましょうか。^⑥

ここでは「ムーサス・セラペウオン (Mousas therapeion)」という言葉が、教養ある有識エリートであることを指す表現となっている。ここから、公正な行政官は「ムーサの女神に仕える者」、すなわち教養文化を共有する者でもなければならなかったことがうかがわれる。古代末期研究の泰斗ピーター・ブラウンは一九九二年の書『古代末期における権力と説得 (Power and Persuasion in Late Antiquity)』において、帝国官僚と各地の名望家を同じ統治者集団として統合する作用を教養が果たしていたことに注目し、この集団のことを先に引用したリバニオスにちなんで、「ムーサに仕える輩 (ともがら yellow servants of the Muses)」と呼んでいる。本稿はこの「ムーサに仕える輩たち」に焦点を当てることで、四世紀の後期ローマ帝国における「学びのネットワーク」の特徴について議論する。まずは、第一章において帝政後期の知識人たちが受ける教育課程とその後の経歴について扱う。次いで第二章で、修辞学に重きを置く当時の教養文化には、知識人と権力者と同じ規範の中に結合する機能があった点に注目する。最後に、皇帝の権力と権威について語る際、当時の文人たちの言説には、過去の事績と現在のローマ帝国との間に連続性を見出す傾向があった点に着目して、後期ローマ時代の教養人の言説が有していた特徴を明らかにする。これらの議論を通して、当時の教養文化、文人たちの価値観や思考様式に着目し、それらが後期ローマの帝国体制と密接に結びついていたことを指摘したい。

一次史料の略称は S. Hornblower, A. Spawforth and E. Eidinow (eds.), *The Oxford Classical Dictionary*, 4th ed., Oxford, 2012, pp. xxviii に準拠する。

- ① P・ブラウン『アウグスティヌス伝』出村和彦訳、教文館、二〇〇四年、上巻二二一―一八九頁。
- ② アウグスティヌス『告白』五・八・一四（服部英次郎訳、岩波文庫、岩波書店、一九七六年）。
- ③ カルタゴで見られたような授業妨害に加え、教師に授業料を払う日が近づくとは別の教師のもとへ逃亡するという（同右五・一二・二二）。
- ④ 同右六・一一・一九（訳は長谷川宜之『ローマ帝国とアウグスティヌス・古代末期北アフリカ社会の司教』東北大学出版会、二〇〇九年、一四七頁のもの）。プラエセス (praeses) とは後期ローマ帝国における属州総督の称号の一つであり、重要性の低い属州を治める最下級の

第一章 後期ローマの知識人の修業と遍歴

まずは、帝政後期の知識人の教育と経歴についてまとめよう。教会人となる前のアウグスティヌスが知識人としてたどった経歴については先に述べたとおりであるが、アウグスティヌスの経歴は当時としては一般的なものであり、数多くの教養人が同じような人生を歩んだとみてよい。彼らの経歴を簡単に示しておこう。まず故郷で文法を中心とする初等教育を受ける。その後、修辞学、法学、哲学といった本格的な高等教育に進むことになる。その際、アウグスティヌスがカルタゴに向かったように、研鑽を積むため高名な教師や多くの学生の集まる学問と文化の中心地へ留学することもまれではなかった。カルタゴ以外では、ローマ、コンスタンティノープル、アテナイ、アンティオキア、アレクサンドリア、ペイリュートなどが有力な候補だった。アウグスティヌスがカルタゴからローマ、ミラノへ移動したように、留学先を梯子する

総督が帯びる *patronus* (A. H. M. Jones, *The Later Roman Empire* 284-602, Oxford, 1964, pp. 45, 106-7, 373, 379, 527-9; D. Slootjes, *The Governor and his Subjects in the Later Roman Empire*, Leiden, 2006, pp. 19-23)。

- ⑤ ミラノ宮廷でのウァレンティニアヌス二世の政権は基盤が脆弱で不安定なものだったことも、アウグスティヌスが世俗の栄達をあきらめアンプロシウスの教会に関心を向ける一因だったかもしれない (N. McLynn, *Ambrose of Milan: Church and Court in a Christian Capital*, Berkeley, 1994, pp. 167-70)。
- ⑥ Lib. Ep. 1261.4. スキュラキオスという人物に宛てた書簡であり、この人物の息子について語っている箇所。
- ⑦ P. R. L. Brown, *Power and Persuasion in Late Antiquity: Towards a Christian Empire*, Madison, 1982, p. 40.

ことも珍しくなかった。学生としてあるいは臨時の教師として各地を遍歴しつつ才能を磨き、官吏として登用される、あるいは公的な教授ポストを得るといったチャンス等待つのである。先に言及したリバニオスもこうした経歴をたどっている。^①三十四年シリアのアンティオキアで生まれたリバニオスは、故郷で文法の学習を終え修辞学の訓練を重ねた後、三三六年から希望していたアテナイへの留学を実現させる。もともと、アテナイの学生たちの素行もローマ同様芳しいものではなかったため、リバニオスは幻滅を味うことになったが、アテナイのような大学町にはローマ帝国中から多くの学者と学生が集まり国際色と喧騒に彩られていたのだろう。^②

彼らが学ぶ学問には、哲学や法学という選択肢もあったが、この時代、学問の花形はやはり修辞学だった。^③修辞学の素養はラテン語やギリシア語の古典作品を徹底的に学習することで培われるものである。古典の精神を自家薬籠中の物とし、洗練された文体を自在に駆使することは、ローマ帝国の支配階級の間人であることを証明する手段であり、かつ帝国の官僚や行政官としてポストを得るための必須の条件でもあった。西方ラテン語圏であればウエルギリウスとキケロを、東方ギリシア語圏であればホメロスとデモステネスを、徹底的に叩き込まれ、こうした古典の語法を一言一句違わず理解し自らも使いこなすことを要求されるのである。ブラウン曰く、修辞学の手ほどきは、さながらオペラのスター歌手が生徒に施すレッスンのような厳しさであり、「アツティカ用法になじまぬ言葉も、弁論の目的から外れる思考も、韻律を損なわせるただの一言も、調和を乱す一言も、教師の注意を免れることはない」^④。

修辞学の訓練によって獲得される教養、ギリシア語でパイデイア (*paideia*) と呼ばれるそれは、エリートを他の人間から区別する指標だった。彼らが駆使する言語は、古典の書物で用いられている言語であり、実際の話し言葉からはかなり遊離した、形式ばった擬古的な文体だったと考えられる。こうした言語を理解できる者は全人口中かなりの少数派だっただろう。しかし、そのことが彼らと同じ教養言語を共有する者として結びつけることになる。型にはまった言語であるがゆえに、面識のない遠方からやって来た人物であっても、共通の言語を通して即座に同じ教養人としてコミュニケーション

ンを取ることが可能となった。パイデアは、帝国中の教養エリート層を結びつける紐帯としての機能を果たしていたのである。^⑤

リバニオスの経歴に戻ろう。三四〇年、アテナイを離れたリバニオスはコンスタンティノープルを訪れその弁論の才によって注目を浴び教師のポストを提示されるが、これが競争相手の敵意を買ったらしく、三四二年、訴訟に巻き込まれ、同市から追放されている。その後、二年間小アジアのニカイアに滞在した後、ニコメディアの町から招聘され、生徒の教育に当たり、度々演説を披露し喝采を浴びつつ、五年間を同市で過ごした。このニコメディア滞在中の時期がリバニオスにとって人生最良の日々だったようである。^⑥他の多くの青年たちも、リバニオスのように、各地の都市をまわりながら文法や修辞学の教師となり生計を立てていたと考えられる。修辞学の教師と比べれば地位の劣る文法教師でも、同じように帝国規模で各地を移動しながら教育に携わり、出世の機会を狙っていたのである。^⑦そして、リバニオスが弁論を披露することによって才能を認められたように、こうした遍歴の中で、彼らの多くは演説や詩を発表することによってより安定したポストを得ようとしていた。アウグステイヌスもカルタゴにいた頃、詩のコンクールで優勝し属州総督のウインディキアヌスから勝利の冠を授かっているが、こうした詩文および弁舌の才を示す場は野心的な若者にとって総督のような政治的有力者の知遇を得て、教育と教養を武器にさらなる出世を目指す機会を提供していた。^⑧重要なのは、彼らが実際に演説や詩を作成して公的な場で読み上げて発表していたことである。そもそも、修辞学は本来「よく語る術」(ars bene loqui)である以上、修辞学を修めたことを証明する一番の手段は、実際に自ら話す、実演することだったのである。ペーパーテストによって相手の素養を計る手段が存在しない古代ローマ社会において、実際に詩や演説を人前で発表することはいつてみれば試験の代わりのようなものだったのだろう。アウグステイヌスが詩を、リバニオスが演説を公表することで注目を浴びたように、おそらく当時、各地の都市ではこのように詩や弁論を披露する場がかなり頻繁に設けられていたと考えられる。なかでも出世や栄達という観点で教養人にとって重要だったのは、皇帝や総督といった帝国の権力者

に対して称賛の辞を述べるという習慣の存在である。

後期ローマ帝国では、皇帝やコンスル、属州総督といった帝国の権力を振う者に対して、その人徳や功績を称える称賛の詩や弁論が数多く作成されたことが知られている。こうした作品はパネギリクス (panegyricus)、「頌辞」と呼ばれており、古典期のアテナイにまで遡る長い伝統を有する修辞学の一つのジャンルだったのだが、後期帝政期のローマは「頌辞の黄金時代」と呼ばれるほど、称賛の辞が数多く作成された時代だった。アウグステイヌスも三八五年、フランク族出身の將軍バウトがコンスルに就任した際、称賛演説を発表している。このような頌辞の作成・公表は当時広く行なわれていた習慣である。実際に発表されたものは模範・見本として集められており、また、どのようなトピックについてどのような順序で話せばよいかを記した手引書や教本のような資料も残されている。修辞学の訓練を受けた者にとって、この種の弁論を人前で発表することはありふれた機会だっただろう。こうした称賛の辞が必要とされる場合は、コンスルの就任式や皇帝の即位記念日のような公的なセレモニーの場合、そして皇帝や総督が都市を訪れるアドウェントゥス (adventus) と呼ばれる入市式など、数多く存在していた。¹² 総督が属州に赴任した際にも歓迎のために一定の型に則った式典ならびに弁論や詩が必要であり、総督用の頌辞の実例もいくらか残されている。¹³ 総督にも必要とされた分を含めれば、この時代、実際に読まれた頌辞の数はかなり多かっただろう。頌辞が帝政後期の知識人にとってありふれたものであったことはこの点からもうかがえる。そうした頌辞のなかで最も高い価値を持つのは、当然、皇帝を称えるためのものである。

アウグステイヌスは皇帝に賛辞を述べることは、嘘と知りつつ嘘をつくこと、嘘であることを知っている者たちに向かつて嘘を語ることであると述べている。¹⁴ それでもアウグステイヌスが頌辞の作成に頭を悩ませていた理由は、頌辞発表の任を務めることが出世への糸口になる可能性を秘めていたからに他ならない。¹⁵ 事実、頌辞の発表をきっかけに社会的上昇を遂げた人物は数多く知られている。ディオクレティアヌスからコンスタンティヌスの治世にかけて、オートン出身の弁論家たちが多くの頌辞をトリア宮廷の皇帝に対して捧げているが、彼らはガリアに滞在する皇帝から寵を得て宮廷の要職

に就いていた。¹⁶ 度々言及したリバニオスは三四九年、皇帝コンスタンティウス二世とコンスタンスに捧げた弁論によって注目を浴び、皇帝自身からコンスタンティノープルで修辞学の教師になるよう招聘を受けている。リバニオスはこの申し出を拒み故郷のアンティオキアへ戻ったが、彼の同時代人で文通相手でもあったパフラゴニア出身の哲学者テミステイオスは逆にこのような機会を存分に活かすことになる。小アジアの諸都市をめぐりながら教師をしていたテミステイオスは、三五〇年、皇帝コンスタンティウス二世に捧げた頌辞によって皇帝の関心を惹くことに成功し、三五五年、皇帝の勅命によってコンスタンティノープル元老院議員の地位を与えられた。これ以後、テミステイオスは三〇年近くにわたってコンスタンティノープル元老院の中心人物として君臨することになる。¹⁷ テミステイオスは本人の代で元老院に入りたいいわば新参者であったが、シユンマクスのような元老院議員家系の貴族であっても頌辞と無縁ではなかった。三六八年、シユンマクスは元老院使節としてローマからトリア宮廷まではるばる赴き、皇帝ウァレンティニアヌス一世と皇太子グラティアヌスのために頌辞を読んでいる。これは、皇帝やその側近たちとの面識を得、政治権力中枢との人脈を築くためである。¹⁸ この時シユンマクスが知遇を得た宮廷の有力者アウソニウスも、一介の文法教師でありながらコンスルや道長官にまで登りつめており、修辞学の教養が栄達をもたらした実例の最たるものに数えられている。¹⁹ エジプト出身の詩人クラウディアヌスも頌辞をきっかけに栄達を遂げた文人の一人である。クラウディアヌスはアレクサンドリアで教育を受けた後、三九四年イタリアのローマを訪れ、三九五年コンスルである二人の元老院貴族プロビヌスとオリユブリウスにラテン語の韻文頌辞を捧げている。これをきっかけに注目を浴びたクラウディアヌスは、翌三九六年には皇帝ホノリウスに対してコンスル就任記念の詩を読んでおり、これ以後クラウディアヌスはミラノ宮廷でホノリウスの後見人たるステイリコを後ろ盾としつつ、宮廷詩人として西帝国の政策と密接に関連したプロパガンダ色の強い一連の詩を発表していくことになる。²⁰ こうしたことを考えれば、アウグステイヌスが頌辞を読もうとしたことも理解できるであろう。頌辞は知識人が権力者の関心を得るのに最も効果的な方法だったのである。皇帝を称えることは当時の文人にとって珍しくない経験であったと思われる。

なぜなら、帝国の公的な式典が各地で行なわれるたびに頌辞が必要とされたからで、たとえば皇帝本人が臨席していなくとも、元老院や総督、地方の名士らの前で皇帝を称える機会が多くあったと考えられるからである。²¹⁾ エジプトのパノポリス出身のハルボクラティオンは、「ギリシアからローマへ、ローマからコンスタンティノープルへ、地方から地方へ、この地上のあらゆる地を渡りながら、勝利をもたらす我らが栄光ある皇帝陛下らの勝利を止まず称え、どこであれ称賛弁論を読み続けた」。²²⁾ ハルボクラティオンが実際に皇帝の前で演説を披露する機会に巡り合えたかどうかは不明だが（おそらくその可能性は低い）、このハルボクラティオンのように、各地を遍歴しながら称賛弁論を手がけ出世を目指すことは、当時、一般的だったのだろう。

こうした遍歴を経験した後、ある者は属州総督になり、またある者は帝国の官吏となった。なかにはアウグスティヌスのように司教となって教会でのポストを得て地方都市に定着する者もあり、あるいはリバニオスのように純粹な教師として身を立てていく者もいた。だが、遍歴を終え一定の地位を得た者にも、果たすべき役割がまだあった。教師として後進の育成に携わるだけでなく、後進が機会をつかめるよう、それまでに培ってきた人脈、パトロネジ関係を駆使して便宜を図ることが期待されていたのである。三一〇年に皇帝コンスタンティヌスに対して称賛演説を読んだオートン出身の逸名弁論家は、元は宮廷の官吏であり、退任後オートンの町で修辞学の教師をしていた人物であるが、自分の息子や弟子を官僚や行政官の地位に就けている。²³⁾ この弁論が読まれた頃にボルドーで生を受けたアウソニウスは、教え子である皇太子グラティアヌスがトリア宮廷の主となると、突如政界の中心に躍り出ることにになり、自分の親族を帝国の重要な官職に次々と就任させたのである。アウソニウスは自分の親族とボルドーに縁のある教師たちを顕彰する一連の詩を残しており、これらは帝政後期における教養を通じた社会的上昇の実例を提供してくれる資料となっている。²⁴⁾ 出世を目指す者は、既に社会的・政治的な威信を得ている人物の人脈を当てにし、ポストの斡旋、ないしそれが可能な知人への紹介を期待して、知人・友人の網の目を伝って集まってくるのである。彼らの期待に応えて紹介状や推薦状を書くことも、「ムーサに仕える

者」の役割だった。後期ローマ時代はこうした推薦状の類が多いことで知られている。先に言及したリバニオスもそうした知識人の一人であり、彼が残した膨大な書簡集には弟子や知人に便宜を図るために執筆した書簡の実例が多く含まれている。^⑤ 西方ラテン語圏では、シユンマクスの書簡集にこうした推薦状の例が多く残されており、アウグステイヌスがシユンマクスの推薦に頼ったのは既に述べたとおりである。教養人が書簡のやり取りを通じて互いに便宜を図り合うという行動はキリスト教徒にも見られるものであり、アウグステイヌスやアンブロシウス、さらにはカイサレイアのバシレイオスやナジアンゾスのグレゴリオスのようなギリシア語圏の教父資料にも、実例が見出せる。結果、この時代は大量の書簡資料を生み出すことになったのである。^⑥

こうしたことから、後期ローマ帝国では帝国規模で張り巡らされた教養人のネットワークが存在し、それを利用して多くの知識人が各地を移動し交流を行なっていたことはたしかだといえる。教養教育を受けた知識人が全人口中に占める割合を考えれば、教養のネットワークに関わりを持った人間の数が帝国民のごく一部であることは否めない。だが、帝国規模で同一の教養文化に基づく知のネットワークが稼動していたことは、それ自体として評価すべきことである。では何故これを可能にしたのか。それはやはり後期ローマ帝国の国家体制であろう。帝国の規模と比べて驚くほど少数の帝国官吏によって統治されていた帝政前期と異なり、帝政後期は官僚機構が出現し中央集権化が進行する時代である。結果、官僚集団は皇帝を頂点とするピラミッド型のヒエラルヒーに編成され、帝国の行政機構は全属州にまで拡大していった。こうして数が増えた官僚ポストを埋めるのが教養教育を受けた知識人だった。教養エリート層は潜在的には官僚予備軍であり、彼らはこの新しい帝国機構の中でポストを得ることを目的にして各地を移動していたのである。そのため、文人たちの帝国規模での移動と交流は、新たな国家機構の出現によって促されたといってもよいだろう。後期ローマの教養ネットワークは帝国の存在と密接に関わっていたわけだが、それは制度面の話にとどまらない。ローマ帝国の権威と権力は教養人の精神や心理の面でも色濃く影を落としていたのである。

- ① リバニオスの経歴については S. Bradbury, *Selected Letters of Libanius from the Age of Constantius and Julian*, Liverpool, 2004, pp. 2-12²
- ② Lib. Or. 1.19. 「皆さん、私は子供の頃、アテナイの市中で学生の集団が殴り合いをするという話を聞きました。棍棒や刃物、石を使って相手に傷を負わせ、法廷に引立てられ、弁明の挙句、判決を受ける」と。しかもそうした暴挙はみな師の評判を高めるためのものだったと。私は彼らの向こう見ずを尊いと考え、故郷のために武器をとるのに劣らぬものと思っていました。私もそうした名声を得たいと神に祈ったものです。ペイライエウスカスニオンで到着したばかりの学生を誘拐し、今度はコリントスで誘拐犯として裁判を受け、宴会を梯子し、有り金使い果たして、金を貸してくれそんな人を探す、そんなことをしてみたいと」。当時のアテナイの教育環境については E. J. Watts, *City and School in Late Antique Athens and Alexandria*, Berkeley, 2006, pp. 24-47。
- ③ 帝政後期は修辭学の素養が出世のための重要な手段であったことが知られる (Averil Cameron, 'Education and Literary Culture', in Averil Cameron and P. Garnsey (eds.), *The Late Empire, A.D. 337-425, The Cambridge Ancient History XIII* (以下 CAH XIII 以下)、Cambridge, 1998, pp. 673-9)。
- ④ P. Brown, *op. cit.*, p. 43 引用されているのは、六世紀初めの修辭学者であるガザのコリキオスである (Choricius of Gaza, Or78)。
- ⑤ P. Brown, *op. cit.*, pp. 35-41; E. J. Watts, *op. cit.*, pp. 1-23。
- ⑥ Lib. Or. 1.51. 「私がデメテルの加護のまじりこめディアで過ごしたこの歳月は何にも勝るものでした。心身の健康、度々披露した弁論、その度に得られた喝采、大勢の生徒たち、彼らの成長、夜の勉学、昼に流す汗、名誉、好意、愛情、すべてにおいて勝るのです」。
- ⑦ R. A. Kaster, *Guardians of Language: The Grammarian and Society in Late Antiquity*, Berkeley and Los Angeles, 1988 が、この人文法教師の活動を網羅的に扱っている。
- ⑧ アウグステイヌス『告白』四・三・五。帝政後期にはエジプト出身の詩人が数多く輩出し、帝国内を移動しながら経歴を重ねていくことも有名である (Alan Cameron, *Wandering Poets: A Literary Movement in Byzantine Egypt*, *Historia* 14, pp. 470-509)。
- ⑨ S. MacCormack, 'Latin Prose Panegyrics', in T. A. Dorey (ed.), *Empire and Aftermath: Silver Latin II*, London, 1975 (以下 Latin Prose Panegyrics 以下), p. 143. M.-C. L'Huilier, *L'Empire des mots: Orateurs gaulois et empereurs romains 3^e et 4^e siècles*, Paris, 1992-23 三世紀末から六世紀に発表された頌辞をリストアップしている (pp. 60-61)。その数は六九だが、親族のために読んだ追悼頌辞を含んでいたり、ヒメリオスの総督用弁論が含まれていないなど、完璧なリストではない。
- ⑩ August, *Contra Literas Petitioni* 3.25.30 に言及があるが、現存はついでである。
- ⑪ 帝政後期のガリアで発表された頌辞を集めた『ラテン頌辞集 (Panegyrici Latini)』が有名である。教本として最も有名なのはマシヤン・ペトロスのものがあが (D. A. Russell and N. G. Wilson, *Memorial Rhetor*, Oxford, 1981)。他にもアイリオス・テオン、ヘルモゲネス、アフトニオスの手に帰される資料が残されている (R. Flower, *Emperors and Bishops in Late Roman Invenitive*, Cambridge, 2013, pp. 44-49)。
- ⑫ 古代末期のセレモニーとしての入市式については S. MacCormack, *Art and Ceremony in Late Antiquity*, Berkeley, 1981 (以下 Art and Ceremony 以下), pp. 17-89。

¹³ ヒメリオスの弁論集に総督用弁論の実例が残されている。ヒメリオスにこゝつては R. J. Penella, *Man and the Word: The Oration of Himerius*, Berkeley, 2007, pp. 1-7 を「総督用弁論」にこゝつて *ibid.*, pp. 207-71 を参照。

¹⁴ アウグスティヌス『告白』六・六・九。「その日、わたしは皇帝に賛辞を述べる用意をしていたが、そのなかでわたしは多くの虚言を語り、虚言を語りながら、その賛辞の正体を知る人びとの氣に入ろうとした。わたしの心は、このような心遣いであえき、身もほそる熱い思いで焼けるほどであったが、ミラノのある街路を通っていたとき、もう満腹していたのであろう、戯談をいってはいやいでいる一人の貧しい乞食を見つけた。わたしは、それを見てため息をつき、いっしょにいた友と、われわれの狂気じみた仕事から起こる多くの苦痛を語り合った」。

¹⁵ 「はじめに」の註④を参照。

¹⁶ 拙稿「テトラルキア時代ガリアにおける弁論家と皇帝」：『ラテン語称賛演説集 (*Panegyrici Latini*)』より「史林」九二―一二、二〇〇九年（以下「弁論家と皇帝」と略）、五一―六〇頁。

¹⁷ テニスティオスにこゝつては P. Heather and D. Moncur, *Politics, Philosophy, and Empire in the Fourth Century: Select Orations of Themistius*, Liverpool, 2001。

¹⁸ C. Sogno, Q. Aurelius Symmachus: *A Political Biography*, Ann Arbor, 2006, pp. 2-22.

第二章 教養のパフォーマンスと帝国の権威

この第二章では、修辞学教養が帝国社会において果たしていた機能に着目することで、教養人と帝国との関係の一面に

¹⁹ J. Matthews, *Western Aristocracy and Imperial Court AD 364-425*, Oxford, 1975, pp. 56-87; H. Sivan, *Ausonius of Bordeaux: Genesis of a Gallic Aristocracy*, London, 1993, pp. 83-91.

²⁰ クラウディウスにこゝつては Alan Cameron, *Claudian: Poetry and Propaganda at the Court of Honorius*, Oxford, 1970 (以下 *Claudian* と略)。

²¹ たとえば三二一年にナザリウスがコンスタンティヌスに捧げた *Pan. Lat. IV(10)* は皇帝不在のなか、ローマ元老院で読まれた。

²² パノポリスのハルボクラーティオンにこゝつては G. M. Browne, 'Hapocraton Panegyrista', *Illinois Classical Studies* 2, 1977, pp. 184-96 ㊦ C. Kelly, *Ruling the Later Roman Empire*, Cambridge, 2004 (以下 *RLRE* と略), pp. 200-203 を参照。

²³ *Pan. Lat. VI(7)23.1-2*, 本章註⑯を参照。

²⁴ 本章註⑱参照。

²⁵ 一五四通にのほる書簡の多くは官僚志願者のための推薦状である (Averil Cameron, op. cit., p. 696)。田中創「古代末期における公的教師の社会的役割：リパニオス書簡集の分析から」『史学雑誌』一一七―一二、二〇〇八年、一―三三頁がリパニオスの果たしたこうした役割を論じている。

²⁶ 古代末期における書簡資料の性格にこゝつては Averil Cameron, op. cit., pp. 696-8 ㊦ J. H. W. G. Liebeschuetz, *Ambrose of Milan: Political Letters and Speeches*, Liverpool, 2005, pp. 28-30。

焦点を当てる。帝政後期においては中央集権化と国家機構の整備が進んだことにより、帝国の権威と権力は地方のレベルにおいても帝政前期以上に浸透していった。では、存在感を増した帝国の行政機構に対し教養人はどのように応じたのか。まずは、こうした制度上の変化が帝国社会にどのような影響を与えたのかについて、近年の研究動向を整理することから始めよう。

ローマ帝国は元々中央集権的な官僚制度や国家機構を備えていない帝国だった。だが、帝国各地には、元からその地方に存在した在地の名望家、都市参事会員と呼ばれるローカル・エリート層が存在しており、ローマ帝国の支配は本来、こうした在地のエリート層と結託することによって維持されていたのである。中央政府直轄の官僚が必要とされなかったのは、こうした地方名士層が地方の自治を担うことで帝国に協力していたことによる。しかし、政権の不安定な「三世紀の危機」を経た後の帝政後期になると、帝国を立て直すために中央集権化と官僚機構の発展が進められたことによって、地方自治は中央行政によって浸食されていったと考えられている。

後期ローマ帝国の国家体制は以前では抑圧的・統制的で、都市の自治という伝統を破壊したとみなされていた^①。だが近年の研究では、後期ローマの国家・社会は以前と比べてかなり肯定的に評価されるようになったといえる。帝政後期には中央政府に直属する官僚の数が増えたが、こうしたポストに就く人間は結局地方名望家のようなそれ以前から帝国でエリートの地位にあった人間ではないかと考えられる。加えて、第一章で述べたとおり、行政機構の拡大は教養人に出世の機会をもたらし、後期帝国では、皇帝体制の強化と国家機構の発展に伴って貴族層の再編成が進んでいたが、ピーター・ヘザーによれば、それは、ローカル・エリート層を帝政前期と異なる形で帝国に結びつけ、政治的一体性を維持・強化することに寄与したという。こうした変化は新たなパトロネジの網を生み出し地方名望家を帝国中央とより緊密に結びつけたものの、社会・政治的な組織編成の次元で衰退が進行していたことにはならないのである。また、官僚の腐敗という現象も帝政後期の文脈において理解すべきことがクリストファー・ケリーにより主張された。それは、皇帝が官僚集

団をコントロールするために意図的に各官僚の職掌範囲や任期、権限を不明瞭にすることによって生じる現象なのである。官僚制に不能率性・非効率性を残すことは、皇帝が宮殿の飾り物となることを阻止し、いついかなる時でも自らの意思で政策に介入し自己の意思を貫徹させるための手段だった。こう考えれば、帝政後期の官僚機構は衰退や退行の表われではなく、皇帝という専制君主が広大な帝国を効率的に統治し続けるのに必要な歯車であつたといえる。ヘザーやケリーの研究からわかるように、後期ローマの国家と社会は没落と衰退というネガティブな語りから解放され、当時の文脈に則してそれ自体として分析・評価すべきものとなつた。ヘザーは後期ローマの制度的発展を全体的には「サクセスストーリー」と評してよいと述べている。^④では、三世紀の危機と混乱を成功裡に克服した後期ローマ社会において、帝国権力と「ムーサに仕える輩たち」はいかなる関係を形成していたのか。

ローマ帝国において知識人とエリートとはほぼ同義であり、帝国社会のエリートは教養に重きを置く各地の名望家によって構成されていた。皇帝が滞在しているような特殊な場合を除くと、こうした各地の有識エリートが接触する可能性の最も高い帝国官憲とは、属州総督である。後期ローマの総督と属州エリートとの関係については、ブラウンやダニエレ・スローチエスが興味深い指摘をしているので、彼らの見解を参照しつつ整理しておきたい。^⑤ディオクレティアヌスの時代より属州は細分化され、一〇〇以上の属州が出現している。しかし、これはローマ帝国の領域が増えたからではなく、元から存在していた属州をより細かく割つただけである。これは、各総督が管轄する領域を狭めることによって、行政・徴税をより緊密に実施するとともに、総督の権力を制限し反乱を防止するためでもあつた。加えて、後期帝国の国家機構では文官・武官の別が生まれた結果、総督は軍隊の指揮権から隔離され、純然たる文官と化した。総督の数が増えた分、一人の総督が発揮する力は相対的に低下したのである。こうして総督の数は増えたにもかかわらず、行政官のポストを狙う官僚志望者の数は増える一方だった。より多くの志願者にポストを回すため、総督の任期は短くなる傾向があつた。推測される任期の長さは平均で二年以下という短さである。さらに、帝政後期の官僚機構では、複数の属州を束ねる管区を統

括する管区代官^⑥、複数の管区を統括する道長官といった、総督よりも上位の官僚が存在する。それ以外にも、在地の有力者、皇帝と直接的な関係を有する者といった官僚機構の外にいる有力者がパトロネジの網を構成していた。総督は複雑化した官僚機構・パトロネジ関係の中で自分より上位の人間から突如干渉を受ける可能性があった。そのため、属州総督が行使できる権力には、事実上、様々な制約がかかっていたと考えられている。こうしたことから、帝政後期においても、属州に派遣される総督は、統治を円滑にこなし円満に任期を終えるために、やはりローカル・エリートとの協力を必要としたのである。確認しておきたいのは、ローカル・エリートと総督の関係を律するのが教養に基づく規範だったことである。

修辞学に基づく当時の教養教育は単に古典の知識と正しい語法を与えるのみでなく、正しい所作振舞いを身に付けさせるものともみなされていた。教養を持つ者は、一定のルールに則った洗練された話し方をするだけでなく、レトリックの訓練を通じて人格を陶冶し、様式化された弁論のように調和のとれた所作、人間関係においてエリートにふさわしい自制ある振舞いを身に付けていると考えられていたのである。「りっぱな話しかたを学ぶとは同時にりっぱな考えかたを、そしてりっぱな生きかたを学ぶことであつた。……雄弁は人間を真に人間ならしめる力であり、文明人を未開人から区別する文化遺産のすべてを盛つた器であつた」、というのは古典古代に通底する思考である。注目すべきなのは、知識人がローマ帝国の権力と対峙する際にもこうした思考が機能することである。^⑦

教養と礼儀作法が後期ローマ社会で果たした役割について論じたブラウンによると、教養人は己の感情を律する自制心を心得ているはずであり、自身の怒りを制御するのみでなく、雄弁の魔力によって他者の怒りをも宥めることができなければならない^⑧という。とりわけ、総督が地方名望家に対して帝国の権力を振るおうとする際には、レトリックによって相手を説得することが期待された。サルデイスのエウナピオスが伝える雄弁家プロハイレシオスの逸話がそうした期待を鮮明に描き出している。^⑨三三〇年代の終わり頃、アテナイの町で度を越した乱暴狼藉のため学生たちの一団がその教師たちとともに総督の前での裁判に引っ立てられるという事件が起こった。この時の総督は、「苛酷で恐ろしい性格をむき

出しにし」、関係者をあらかた投獄したため、学生や教師は「髪は伸び放題、身体はひどく痛めつけられた状態で」裁判に臨んだ。総督は厳しい態度を崩そうとしなかったが、被告の一人だったプロハイレシオスが弁明を始めると態度を一変させる。プロハイレシオスが前置きで総督が自分たちに下した処置は不当であることを指摘すると、「総督もただだ頭を下げるばかりで、彼の弁論の趣旨や文体の重厚さ、弁舌の流暢さや朗々とした響きに完全に打ちのめされた」という。そして第二の前置きに入るや否や、「総督はその席から跳び上がり、紫の縁どりをしたガウン……を震わせた。そして、あの苛酷で厳しい裁判官が、まるで小さな子供のように、プロハイレシオスに喝采を送った」という。^⑩ 教養人は言葉の魔力をもって権力者を説得するという役割を演じ、総督も教養人の一人としてそれに動かされ相手にしかるべき敬意を払うという役割を演じる、という逸話である。これが教養ある文人に期待される行動だった。無論これは理想像であり、すべての総督がこうした規範に忠実だったわけではない。しかし重要なのは、このような教養に基づく行動規範が権力の行使に一定の制約を課す可能性があったことである。

総督に任命される人間は、基本的に教養教育を受けた知識人、つまり「ムーサの女神に仕える輩」である。したがって、赴任先で総督を迎えることになる在地のエリート層とそこへやってくる総督は、同じエリート階層に属し同じ文化的規範を共有する者同士だったことになる。総督はこの規範に則った行動をとることを期待されたのである。スローチエスの研究を参考にしつつ、赴任した総督に何が待ち受けていたのかを少し見てみよう。^⑪

総督は任地に赴任すれば、属州民が用意する歓迎のセレモニーに出席することになる。このとき総督は、劇場のような聴衆を収容できる場所に向かい、大勢の前で弁論家の語る歓迎の辞を聞かなければならなかった。この総督用の称賛弁論は決まった形式に則ったものであり、総督の血筋や学識、徳を称え、総督が任地に対して善政と善行を施してくれることを期待するものだった。^⑫ 総督はこのセレモニーを通じて自分が果たすことを期待されている役割を理解するものとみなされていたのである。もし総督が首尾よくその期待に応えた場合、任期の終了後、その総督の徳を称えて像のついた頌徳碑

を建てる慣行があった。たとえば、四世紀末ないし五世紀前半にカリア属州で総督を務めたオイクローメニオスに捧げられた碑はこう述べている。「法に通じ、イタリアのムーサとアッティカの甘美な響きを混ぜ合わせた聞こえ高きオイクローメニオスに、アフロディシアスの参事会が親愛の念をもってこれを建てる。「総督としての」思慮と施政いずれも清廉なる者に対して、よき記憶以上にふさわしき贈り物があるうか」¹³。このような教養に基づく社交辞令は円滑な属州統治に必要な要素だったと考えられている。総督が赴任先の地方名望家層と同じ「ムーサの女神に仕える輩」として扱う限り、実際の力関係は覆い隠され、表面上は両者が対等であるかのように装われる。こうした配慮が地方名望家の協力を取り付けるには必要だったのである。

ブラウンのいうように、教養に基づく規範には権力の行使を律する機能が¹⁴あった。たしかにすべての総督が期待されたとおり振舞うわけではない。属州総督も原則的には教養エリート層の一員だったが、教養のない、出自の低い人間が高い地位に就く事例も時折あり、また、教養人だったとしても、帝国・皇帝権力の代理人として厳しい立場で臨んだり、自身の利害を優先して任地の人間を犠牲にする可能性もあった。むしろ、帝政後期は帝国官憲の行使する暴力に歯止めをかける制約が乏しいことで知られており、本来乱暴な扱いを免れているはずの名望家ですら総督から鞭打ち、投獄のような苛酷な扱いを受けることがあった。だが、そのような態度は、「ムーサに仕える輩」であることを自ら否定したに等しく、礼節ある教養エリートとして深刻なマナー違反だった。そうした逸脱行為は文人たちの注意を免れはしなかったのである。そのような場合、リバニオスやキュレネのシユネシオスがしたように、一種の報復として総督の言動を非難する弁論や書簡が書かれた。¹⁵ こうした批判の言説も、「学びのネットワーク」を経由して各地の知識人に共有されることになったのである。これには、総督の今後の経歴を困難にしたり将来の追及や失脚を引き起こしたりする可能性があり、総督の行動に制約を課すことに寄与したと考えられている。¹⁶ こうした批判の言説が実際にどの程度総督の行動に歯止めをかけることができたのかは判断が難しい。¹⁷ しかし、総督は教養の規範に配慮し地方名望家との関係を良好なものに保つことを期待され

ていたし、原則的には現にそうしていたとみなしてよいのではないか。教養に基づく作法や規範、またそれを可視化する歓迎式のようなセレモニーは、知識人と総督を同じ価値観の中に接合し、そうすることで当の価値観自体を補強・再生産していたのである。こうした行ないを通じて地方名望家、有識エリート層は後期ローマの国家構造に結びつけられていたともいえよう。

通説的な後期ローマ像と比べて、今度は逆に帝政後期を肯定的にとらえずと思う向きがあるかもしれない。たしかに、後期ローマ社会は階層のいかなる次元においても暴力の目立つ時期であり、特に国家が強圧的に権力を行使する際、その抑圧の度合いは際立っている。後期ローマ帝国が皇帝を戴く専制国家であることは否定すべくもない。だが、専制国家における権力の行使が見かけほど単純なものになるとは限らないし、権威はただ強制と命令のみによっては効果的に行使されないのである。権力と権威を正当化し臣民に納得させるには、支配者と被支配者の双方が受容できるようなイデオロギーが必要とされる。帝政後期の社会においては、教養がこのイデオロギーを構成する重要な要素の一つだったのである。逆に、中央国家機構の地方への波及に伴って、中央政府と地方との距離が狭まる可能性もあった。総督の数の増加と官僚機構の階層化によって、逆に地方と中央とのコミュニケーションはより密なものになったともいえる。田中創が指摘するように、道長官のような国家上級官吏がむしろ地方と中央の仲介者として機能することもある¹⁸。だが、中央が地方に引き寄せられるのと同程度に、中央の皇帝の求心力がいや増すことにも注意する必要がある。ジョン・ヴァイスヴァイラーが主張するように、帝政後期の「成り上がり者」たちは（たとえ教養を媒介にした栄達だとしても）、皇帝の寵と支持に自らの地位を強く依存していた。新しい帝国の貴族層は神聖化の度合いを強める皇帝の権威・権力と強く結合していたのである。¹⁹ 後期ローマ帝国は万事が皇帝の権威に結びつく時代であり、「学びのネットワーク」もこの文脈のもとに理解する必要がある。

教養エリート層は、教養が生み出す規範や礼儀作法を通じて権力者の行動を一定の枠にはめようとしていた。それがど

の程度の効果をあげるのかは不明だが、重要なのは、こうした一定の様式に則った振舞いをするのが、総督を相手にする際に意味を持つと思われていたことなのである。いってみれば、教養文化によってローマ帝国の権力を制御し操作することができると知識人たちは信じていたわけであり、その信念が通底していること自体、統治のメカニズムを支える歯車の一つだったのである。ここからも、帝政後期の教養文化が帝国の存在と不可分に結びついていたことが理解できるだろう。

- ① 弓削達『ローマ帝国の国家と社会』岩波書店、一九六四年、二五七～八二頁。
- ② P. Heather, 'Senators and Senates', *CAH XIII*, pp. 184-210.
- ③ C. Kelly, 'Emperors, Government and Bureaucracy' (以下 EGB と略), *CAH XIII*, pp. 138-83; id., *RLRE*.
- ④ P. Heather, *The Fall of the Roman Empire: A New History of Rome and the Barbarians*, Oxford, 2005, p. 141. ただし、それが本当にローマ帝国を四世紀末以降の危機に効果的に対処させたかどうかは検討の余地がある (W. Harris, *Roman Power: A Thousand Years of Empire*, Cambridge, 2016, pp. 264-302)。
- ⑤ P. Brown, *op. cit.*, pp. 20-34; D. Slootjes, *op. cit.*, pp. 16-45.
- ⑥ ラテン語ビウカリウス (vicarius) の「道長官」の意 (A. H. M. Jones, *op. cit.*, p. 47)。
- ⑦ H. I. マー『古代教育文化史』横尾壮英ほか訳、岩波書店、一九八五年、一三三九～四〇頁。
- ⑧ P. Brown, *op. cit.*, pp. 35-70.
- ⑨ サルデイスのエウナピオスについて R. J. Penella, *Greek Philosophers and Sophists in the Fourth Century A.D.: Studies in Eunapius of Sardis*, Leeds, 1990°
- ⑩ サルデイスのエウナピオス『哲学者およびソフィスト列伝』四八四(戸塚七郎訳、西洋古典叢書、京都大学学術出版会、二〇〇一年、三二一～六頁)。「プロハイレシオスにつづいては E. J. Watts, *op. cit.*, pp. 48-78°。
- ⑪ D. Slootjes, *op. cit.*, pp. 105-153.
- ⑫ メナンドロスの頌辞ベニユアルに総督用頌辞弁論の模範例が残されている。「最も偉大な総督閣下よ、閣下のお越しになったことも甘美なる日よ。今や太陽は輝きを増し、暗闇から抜け出て幸福な日の曙を見るかのよう。すぐに像を建てましょう。詩人も作家も弁論家も閣下の徳を歌いその名声をすべての人に知らしめましょう。劇場を開き、祝祭を催し、皇帝陛下と神々に我らの感謝を捧げよう」(Men. Rhet. 381.15-23)°。
- ⑬ D. Slootjes, *op. cit.*, p. 137. 公正や「法知識に加えて、ムーサに言及しつつ修辭学の教養の高さを称えている」ことに注意。オイクーメニオスはギリシア語だけでなくラテン語にも通じていたようである。
- ⑭ P. Brown, *op. cit.*, pp. 48-58.
- ⑮ D. Slootjes, *op. cit.*, pp. 162-73.
- ⑯ P. Brown, *op. cit.*, p. 55; D. Slootjes, *op. cit.*, p. 180.
- ⑰ D. Slootjes, *op. cit.*, pp. 162-7. リバニオスによるティサメヌス罷免

の試みは実現しなかった。

¹⁸ 田中創「帝政後期における道長官の変容：道長官と州の結びつき」
（桜井万里子・師尾晶子編『古代地中海世界のダイナミズム：空間・
ネットワーク・文化の交錯』山川出版社、二〇一〇年、三八一頁）。

¹⁹ J. Weisweiler, *Domesticating the Senatorial Elite: Universal Monarchy and Transregional Aristocracy in the Fourth Century AD*, in J. Wienand (ed.), *Contested Monarchy: Integrating the Roman Empire in the Fourth Century AD*, Oxford, 2015, pp. 17-41.

第三章 過去と現在をつなぐ——教養文化のなかの皇帝像

最後の第三章では、教養人たちが駆使していた言説の中身に関して、ローマ皇帝の表象との関連に注目しつつ議論したい。第一章で述べたように、後期ローマ帝国の知識人の経歴にとって最も重要だったのは皇帝を称える頌辞を發表することだった。本章では、この頌辞の言説に注目してローマ帝国のイデオロギーと知識人の関係を読み解くことになるが、その前にイデオロギーを分析する資料として頌辞を用いることの妥当性について検討したい。

先に言及したように、アウグスティヌスは頌辞を読むことは権力者の前でうまく嘘を述べることだと述べている。皇帝用の頌辞は、現在の皇帝の功績や美德を称えるものであるため、不適切な事柄には言及されず、失敗を成功と強弁することもある^①。加えて、現在の皇帝を称賛するために前任の皇帝を批判したり、同じ皇帝が生前と死後でまったく異なる評価を与えられることもある^②。もとより、頌辞作家の語る皇帝の姿はあまりに美化されたものであり、これを額面通りに受け取ることではない。権力におもねるインテリ知識人の阿諛追従、壮麗なセレモニーの場に供されるプロパガンダの添え物と、頌辞を評する向きがあるのは当然といえよう^③。本稿は頌辞のこうした側面を否定するものではない。だが指摘しておきたいのは、当事者自身が虚偽の塊であることを認めているにもかかわらず、数多くの頌辞が古代末期に作られ書き伝えられて現存しているという事実である。出世の手段であること、後続にとつての模範として実例が保存されたことを割引くとしても、頌辞發表が帝政後期の政治の世界でかなり一般的な光景であった事実はそれ自体何かしらの説明を要する

事態である。我々は頌辞の言説をどのように扱うべきなのか。

まず、指摘しておくべきなのは、頌辞の語る政治上のプロパガンダはある特定の場所、時間、状況と結びついていることである。その頌辞が発表された時点で企図されている政策、流布させようとしているプロパガンダを、頌辞は反映している。サビーヌ・マッコーマックの言葉を借りれば、頌辞はある特定の場所、ある特定の瞬間の状況を詳細かつ深く「結晶化」しているのである。^④そのため、ここで語られるプロパガンダはその時点の政治的・歴史的背景を踏まえていなければ意味をなさないし、後代の人間がその機能を理解することも難しくなる。また、政治情勢と政策の変化に合わせて語られる内容が著しく変化していくことも、この点から理解できる。ちょうど現代世界のマスメディアが流布させる政治家やアナリストの政見と同様、この手の言説に客観性や一貫性、正直さを求めるのはそれ自体ナンセンスであろう。したがって、ある特定の時期にいかなる政策が追求され、どのようなプロパガンダや公論を流布させようとしていたのかを知ることができるといふ意味では、頌辞は政治史の資料として十分に利用可能である。これと関連して重要なのは、頌辞は公的な言説としての性格を帯びるという点である。

第一章・第二章で述べたように、頌辞は帝国のセレモニーの場で公的に読み上げられる。元老院や都市参事会の議事堂、皇帝の滞在する宮殿に付属したホールなど、一定の広さを持った場所が会場であった。皇帝やコンスル、属州総督を献呈対象としながらも、皇帝の側近や、官僚、総督の下僚、その地域の名士たち、さらには式典の場にやってきた他の地域の名士や使節といった多くの人間が発表の場には居合わせていた。頌辞発表の場には帝国の支配者階級に属する人間が聴衆として集うと考えられる。こうした聴衆の存在には重要な意味がある。なぜなら、聴衆を前にして現職の皇帝の功績を称えることには、現在の皇帝が正統な君主でありその統治が正しいものであることを帝国の臣民が承認し受容していることを確認する機能があったとみなされているからである。マッコーマックによれば、頌辞の発表それ自体が「合法的な統治の証であり、民衆からの同意の形態」だった。^⑤帝国の式典の場に出席して、皇帝を称える演説にただ耳を傾けるだけの行

為にも、実は象徴的な意義があったのである。その意味ではセレモニーの陰の主役は、皇帝でも弁論家でもなく、ロジャー・リースがいうように物言わぬ聴衆だったのかもしれない。^⑥また、頌辞の機能を考察する際には、ケリーの以下の指摘も一聴に値する。「インフレ気味の後期ローマ皇帝像に付き物のプロパガンダ的な誇張、偽善、冗長なこけおどしの数々はしばしば眉を顰めさせるほどであるが、こうした修飾過多な権力の表象も真剣に受け止めねばならない。帝国は軍事力と効率的な行政のみによって維持されるものではない。その統治の公正さと權威を知らしめるのに効果的なイデオロギーも必要である。こうしたシステムは、もっと具体的な権力の表明と同程度に重要であり、統治者・被統治者の双方にとって強制的なものとなる。こうした観点からすれば、四世紀の社会を彩る数多のセレモニーは、皇帝とその政權の正統性と優位性を確立し宣伝するための鍵だったのである。壮観さと権力とは不可分に結びついていたのだ」^⑦。現在の皇帝による統治が正統なものであることを大勢の人間が確認するという機能が頌辞の発表にあったと考えれば、なぜ頌辞が頻繁に読まれたのか、そしてなぜ頌辞発表の任を担うことが榮達的手段になると教養人が認識していたのかも、理解できるだろう。この慣行は後期ローマの皇帝体制にとって必要不可欠な要素の一つだったのである。

頌辞は人前で発表されるだけでなく、書かれた形で流布していたことにも留意しておく必要がある。頌辞は公的に読み上げるだけでなく、作品として保存されるものであった。『ラテン頌辞集』のように複数の人間の手になる作品が編纂されて残されたのは、実際に読まれた作品は後続にとって手本になるからである。加えて、自分の披露した頌辞を書き写して友人仲間に送るという習慣もあった。たとえば、テミステイオスは皇帝ユリアヌスのために作成した頌辞の写しを作って友人のリバニオスのもとに送っている。リバニオスはこの弁論を友人ケルススとともに読み、技巧や語法について議論しており、感想をテミステイオスに返してもいる。^⑧このように、公表した頌辞を保存し、文人同士の間で互いに送り交わし、その出来具合について議論するという習慣もまた存在していた。つまり、頌辞の内容は発表の場に居合わせた聴衆だけでなく、帝国中の文人たちに知られるものだったということである。当然、作成する側も後日大勢の人間の目に触れる

ことは織り込んでいるはずであり、それを前提にして準備したはずである。この意味でも、頌辞の言説は一種公的な性格を帯びることになる。これは式典に出席した人間にしか届かない閉鎖的なものではなく、「学びのネットワーク」を通じて帝国中の文人たちの間で共有される言説と考えるべきだろう。

皇帝の功績を称えるという内容、発表自体が皇帝の正統性を確認するものであったという点、そして頌辞の言説が帝国中で共有される公的な性質を帯びること、こうした事実を考え合わせると、頌辞にはローマ帝国を維持するうえで重要な機能が備わっていたといえる。すなわち、頌辞には、ローマ帝国の統治を住民に受け容れさせると同時に、ローマ帝国の統治が何によって正当化されるのかというイデオロギー上の根拠を確認・補強させる作用があるのである。皇帝に対する個々の称賛の言葉は虚偽ないし誇張であるとしても、それがローマ皇帝に期待される行動、ローマ皇帝が備えているべき態度を表明していることに変わりはない。そして、もし頌辞の中で皇帝に向けられる言葉に何か一貫した特徴があるのなら、そこからはローマ皇帝を皇帝たらしめ、ローマ帝国を帝国として維持し続けるためのイデオロギーが読み取れるのではないだろうか。本稿が特に着目するのはこの点である。

では、頌辞の言説から看取される、皇帝に期待される一貫した役割とは何であろうか。それは、ローマの過去と現在を接合することであると筆者は考えている。皇帝も総督同様、公正な統治者であり、臣民に対して善行を為すことを求められるが、同時に、皇帝は栄光ある過去と現在のローマ帝国を接合する役割も担っている。頌辞が皇帝を称賛する際に決まって用いる方法とは、現在の皇帝を神話や過去の時代に属する英雄や指導者と比較しながら、今の皇帝が過去の英雄に比肩し、あるいはむしろ過去の指導者を凌駕しさえすると述べることで、献呈相手を称えることなのである。メナンドロス^⑨の頌辞執筆マニュアルには、称賛の対象を過去の偉人と比較することが効果的であることを指摘し奨励する箇所があるため、こうした語り方は一般的なものだったと思われる^⑩。しかし、頌辞において皇帝を過去の偉人と比較する際に特徴的な点は、共和政期にローマを防衛し帝国を拡大することに寄与した将軍や指導者たちを比較対象として持ち出すことがきわ

めて多いことなのである。

ディオクレティアヌス時代の弁論家は、ディオクレティアヌスと共治帝マクシミアヌスの二人をアレクサンドロスやスピオ・アフリカヌス、ロムルスとレムスより偉大な存在だと述べている。^⑪マクシミアヌスの下僚帝たるコンスタンティウス一世の功績はカエサル以上だった。^⑫コンスタンティヌスにいたっては、ローマの過去のあらゆる將軍や皇帝よりも優れた皇帝であると語られている。^⑬テミステイオスのギリシア語の称賛演説にも類似的の発言がある。テミステイオスによれば、コンスタンティウス二世はカミッルスやロムルスを凌駕する存在であり、ウァレンスはスキピオやルキウス・ムンニウス、メテッルスよりも偉大な人物なのである。^⑭とりわけ、皇帝は過去の時代、特に共和政期の大征服戦争の時代のローマの栄光を今に再現することを期待されている。ある弁論家の言葉は象徴的である。「ポエニ戦争や、アジアとシリアの王たち（アンティオコス三世とミトリダテス六世）に引き続き、ローマの広場のロストラを新しい戦利品で陛下ら（ディオクレティアヌスとマクシミアヌス）が飾り、コンティオ集会の際のあの厳かなる場がなぜロストラと呼ばれるのかを既に忘れて久しいローマ市の住人たちに、陛下らが記憶を呼び起こしてくださいますように」。^⑮テトラルキアの皇帝たちは、共和政期の軍事指導者がカルタゴやヘレニズムの君主たちを相手に戦った時のように、新たな戦勝の栄光を今のローマにもたらしことを期待されているわけである。ローマ皇帝は外敵と戦い勝利することで、かつてのローマの栄光と自信を取り戻す存在とみなされている。クラウディアヌスもステイリコに対して同じやり方で称賛の詩を書いている。五世紀初頭、イタリアに侵入したゴート族を一旦撃退したステイリコは、かつてユッロス王を撃退したクリウスより偉大であり、ハシニバルを撃退したファビウスやマルケッルス、スキピオをも凌駕するというのだ。^⑯後期ローマ帝国では、皇帝・帝国に関わるセレモニーが挙行されるたびに、文人たちの口からこうした言説が繰り返し吐き出されていたとみて間違いない。こうした考え方が周知のものだったことは、キュレネのシュネシオスによる『君主論』の一節からもうかがえる。

私の勤める事柄はもはや容易ではないと陛下（アルカディウス）は思われるのですか。陛下は、自分がいかなる人間たちの王であるのかを、私がいかなる民について語っているのかを、理解しておられないのですか。ローマ人は自分たちが出くわした者すべてを力と策略によって屈服させ君臨しているがゆえに、その名はあらゆる地に知れ渡っているのではないのですか。まるでホメロスが神々について詠うように、「人間の無法な振舞いと正義の行ないに目を光らせながら」、この地上を踏み渡ったのではないのですか。^⑩

東方ギリシア語圏のキリスト教徒であるシユネシオスにこうした発言が見られることから、帝国と皇帝の役割に関するこのような発想が帝国中に浸透していたことがうかがえる。頌辞においてローマ皇帝に期待される役割は同一である。皇帝本人の個性や能力とは関係なく、ローマ皇帝は過去の偉人や指導者の功績を模倣しかつ凌駕することによって、過去のローマの栄光を今に再現するという、過去と現在との結節点としての役割を演じることになるのである。

頌辞に見られる皇帝への称賛の言葉からは、現在の人間を過去の偉人や英雄になぞらえ、それを通して過去の出来事を現在に再現・再演することによって、過去と現在の間にイメージ上の連続性を生み出すという特徴が見出せる。この点は、後期ローマ・古代末期時代の資料に広く見られる特徴であることを、ここで確認しておきたい。この特徴はキリスト教資料にも見出せることを、マイケル・ウィリアムズは指摘している。たとえば、カイサレイアのエウセビオスは皇帝コンスタンティヌスを、通常の頌辞のようにスキピオやカエサルのようなローマの英雄の系譜に連ねる代わりに、モーゼやキリストに比肩する存在として描く。ニュッサのグレゴリオスは兄であるバシレイオスを称える際、バシレイオスをモーゼの役割を今に再現する者、現代のモーゼとして描いている。結果、現在のローマ帝国は聖書の過去と接合されることになり、両者の間に連続性が発生する。称賛の対象が聖書の登場人物の役割と聖書の過去を再演することによって、現在のローマ社会は聖書の預言者や使徒の伝統に連なる世界へと一変するのである。この際、称賛をする側の人間、資料の作成者も、

ある役割を演じている可能性がある。たとえば、ウィリアムズによれば、兄であるバシレイオスをモーゼになぞらえることで、弟であるグレゴリオスもアロンという聖書の登場人物に接近することになる。¹⁸⁾ この点はリチャード・フラワーによっても指摘されている。フラワーは、アリウス派の皇帝コンスタンティウス二世を批判したアタナシオスやポワティエのヒラリウスといったニカイア派のキリスト教徒による誹謗文書を分析するなかで、批判の対象であるコンスタンティウス二世をカインやサウル、イゼベルのような聖書の悪役、さらにはネロのような迫害者に比肩させることで、逆に批判をしている作者もそうした悪役と対峙した人物、預言者や使徒、殉教者といったキリスト教文学における英雄に自身をなぞらえる効果が生まれると指摘している。これにより、信仰をめぐる戦いが旧約聖書の時代から現在まで継続しているというイメージが生まれ、資料の作成者はキリスト教的な過去に登場する偉人のペルソナをまとうことで、信仰の戦いを担う者、権力者に対峙する者として、一種の権威を自らに付与するのだと指摘されている。¹⁹⁾ このように古典や聖典に依拠して過去と現在を接合することは、権威を構築し操作する手段の一つだったのである。

この点を念頭に置いて、頌辞の言説を振り返ってみよう。称賛の辞を発表する文人たちは、今のローマ皇帝を神話や歴史の英雄になぞらえ、かつての栄光が今に再現されていると語るることによって、彼ら自身はいかなる役割を果たしているつもりなのだろうか。おそらく彼らは、自分が修辞学の教育を受けているときに読み込んだ作品の作者、キケロやウェルギリウス、ホメロスやデモステネスのような、過去の偉大な作家の列に自らも連なっているとらえていたのではないか。これは、文人たちが古典作品の持つ権威を利用し、自らにその権威を付与する一つの手段だったのである。詩人のクラウディアヌスに対して同時代人が与えた「ウェルギリウスの思惟とホメロスの詩才を備えた者」という顕彰の言葉には、現代の古典学者なら苦笑せずにはおれないだろう。²⁰⁾ だが、帝政後期のローマ帝国における習慣や規範を念頭に置けば、これはあながち空虚な世辞ではなかったのかもしれない。ローマ皇帝が共和政期の英雄や偉人の役割を継承するように、皇帝を称える文人たちもかつての偉大な詩人の後裔という役割を演じること、ある種の権威を操作しそれを自らに付与し

ていたのではないだろうか。加えて、現在の皇帝に過去の英雄の役割を再現させることにも、特に重要な意味があったのではないかと筆者は考えている。

皇帝を過去の英雄の系譜に位置づけるという要素は、とりわけラテン文学において重要な意味を持っている。これは「永遠のローマ」理念と関連していると思われるからである。「永遠のローマ」とは、ローマはいかなる危機に直面したとしても、必ず新しい偉大な指導者が現れ、そのもとで危機を克服し、以前にも勝る繁栄を手に入れるという考え方であり、この理念は、カミッルスによるガリア人撃退やスキピオによるハンニバル撃退といった共和政ローマのたどった歴史そのものによって支えられている。²¹⁾ クラウディアヌスを分析したキャサリン・ウエアによると、ステイリコへの頌辞において、ステイリコを過去のローマの偉大な英雄に比肩する存在として描くことで、ステイリコという英雄的指導者の下、ローマの永遠と「黄金時代の回帰」は約束されるとクラウディアヌスは主張しているのだという。²²⁾ 厳密に言えばステイリコは皇帝ではなく皇帝ホノリウスの後見人であるが、クラウディアヌスの韻文頌辞においてステイリコが果たしている役割は、通常、頌辞において皇帝が果たしている役割と同一である。つまり、クラウディアヌス以外の頌辞においても同じ主張が当てはまるということになる。頌辞の中の皇帝は皆、ローマの偉大な過去を現在に再現・再演することによって、黄金時代を取り戻しローマを再生させる存在なのである。加えて、現在の皇帝を黄金時代の回帰と結びつける発想はアウグストゥス時代にまで遡るものであり、ローマの帝国・皇帝体制と強く結びついていることを思わせる。ウエルギリウス『アエネイス』におけるアウグストゥスも、アエネアス、ロムルス、カミッルス、スキピオ、カエサルといった英雄たちの系譜に連なる存在であり、ローマ人同士の内乱という危機を克服し平和と繁栄を取り戻すことでローマの再生を実現させたのである。²⁴⁾ 帝政後期の頌辞において、皇帝たちが皆過去の英雄の功績を凌駕するのは、こうした文学的伝統とイデオロギーを受け継いでいるからに他ならない。あらゆる皇帝はローマの再生と永遠を実現させなければならず、それこそが正統な皇帝の証だったのである。帝政後期の文人たちは皆、古典の伝統を受け継ぎ称賛の言葉を紡ぐなかで、アウグスト

ウスの時代に遡る「永遠のローマ」というイデオロギーを再生産し、かつての偉大な詩人と同じように皇帝という一個人の中に時代や国家の再生を見出していたのではないか。

もう一点指摘しておきたい。このような方法で皇帝を称賛することには累積的な効果があると思われることである。頌辞の中の皇帝は、過去の栄光を今に再現し征服戦争時代の勝利を現代において再演することで、過去と現在を接合し、ローマの栄誉ある過去と現在との間に連続性の感覚を醸成し、ローマの力の再生と永遠を保証する存在として常に描かれる。実際の能力や人格とは無関係に、現職の皇帝は必ずこの役割を果たす者でなければならない。たとえ皇帝の誰かがこの役割を果たすことに失敗したとしても、それが批判されるのは本人の死後のみである。そして、後を継いだ皇帝は、前任者とは違って、ローマ帝国の皇帝にふさわしい功績によって黄金時代を再生させると語られ続けるだろう。したがって、言説の枠組み自体が批判されることはなく、同じ理念は何度も再生産されかえって強化されていくのである。当時の教養文化がこのような言辭を生み出すことに加担していたとなると、それに伴う結果は容易に予想できる。この言説の枠組みを誰も疑わない、ないし疑念を表明しないと思われるのである。同時に、帝国の復活と永遠は皇帝がこの役割を果たすか否かにかかっている以上、理念において皇帝が持つ意義は重大なものとなる²⁵。その結果、自らの期待と希望のすべてを皇帝に仮託するような発想が生じるのではないか。元官僚で『ローマ皇帝史』を著したアウレリウス・ウィクトルについて分析した井上文則は、アウレリウス・ウィクトルにこうした態度が見出せることを指摘している。身分にかかわらず教養を得ることによって立身出世が可能になるといふ、教養人にとっては理想的ともいえる後期ローマ帝国ではあるが、そうした出世を実現させたアウレリウス・ウィクトルは、皇帝によって帝国が理想的な状態へ変わりうるという信念を抱いていたという。おそらくこれはアウレリウス・ウィクトルという史家に限ったことではなく、帝政後期の国家機構の中で栄達を望んで機会があるごとに頌辞を公表した当時の知識人全員にあてはまる特徴であろう。「ムーサに仕える輩たち」は皆、絶対的な専制君主である皇帝による問題の解決と改善を信じねばならなかったのである。

本章では頌辞の言説が持つ特徴と作用を見てきた。頌辞には、現在の皇帝が過去の栄光を再現すると語ることを通して、ローマ帝国が永遠に繁栄を続けるというメッセージを発信する機能があった。そして、これが現職の皇帝の地位と権威を保証する役割をも果たすのである。同時に、ローマ帝国の再生と永遠を謳う言説は帝国の文人や統治階級の間で共有された。このような言説を作り、流布させ、互いに共有することを通じて、帝国のエリート階級は自分たちが同じ帝国の一員であることを確認し、かつ、ローマ帝国を帝国たらしめる理念や規範が何であるのかを再確認、補強していくことになったのではないか。これまで述べてきたように、頌辞を発表するという慣行は、帝政後期の政治の風景において必要不可欠な要素であり、教養教育を受けた知識人の経歴において非常に重要な意味を持つものであった。たとえ権力者への称賛の言葉が虚偽であっても、そうした言説が繰り返し再生産されることの意味を見落としてはならない。個々の言葉が虚偽であったとしても、頌辞の言説によってローマ帝国およびローマ皇帝の権威を正当化する思考様式自体は強化されていくだろうからである。そのため、個々の皇帝の政策や言動に不満を持つことはあっても、皇帝が存在し続ける仕組みや皇帝の担う使命そのものが疑問に付されることはない。後期ローマ帝国の知識人は頌辞の生産を通して、帝国の存在と使命を自明視するイデオロギーに密接に結びついていたと考えなければならない。

① たとえばテミスティオスは不首尾に終わった軍事行動を糊塗する¹⁾とがある。たとえば、ユリアヌスの始めたペルシア遠征の顛末についての記述や (Them. Or.565b-67a)、ウァレンスの第一次ゴット戦争後に結ばれた講和についての言及が挙げられる (Them. Or.10, 132c-135c)。

Power: *The Role of Panegyric in Late Antiquity*, Leiden, 1998, pp. 139-41)。

② 『フアン・頌辞集』中のマクシミアヌスや(拙稿「弁論家と皇帝」六〇〜七三頁)、『テミスティオス』『弁論集』中のコンスタンティウス二世およびウァレンスがこつした例にあたる (P. Heather, 'Themistius: A Political Philosopher', in M. Whitby (ed.), *The Propaganda of*

③ Alan Cameron, *Claudius*, p. 37; 保坂高殿『ローマ帝政中期の国家と教会: キリスト教迫害史研究一九三―三二一年』教文館、二〇〇八年、四一頁。

④ S. McCormack, 'Latin Prose Panegyrics', p. 159.

⑤ S. McCormack, *Art and Ceremony*, p. 9. こつした儀礼的な行為が帝国のイデオロギーを強化し住人の間に同意を醸成しつつという点は、C. Ando, *Imperial Ideology and Provincial Loyalty in the Roman*

Empire, Berkeley, 2000 がよく議論している。たとえば、頌辞發表には付き物の聴衆からの歓呼の叫びが、無意識のうちにローマ支配への同意を生み出すという点については同書の pp. 203-5 参照。

- ⑥ R. Rees, *Layers of Loyalty in Latin Paganism*, AD 289-307, Oxford, 2002, p. 15.

- ⑦ C. Kelly, *EGB*, p. 145.

- ⑧ Lib. Ep. 14301-2 「あなたの弁論を受け取りました。高貴な方を称える高貴な弁論です。称賛の相手が高貴であることはあなたも認めるでしょう。崩御されたとはいえ、真実は嘘を語る多くの口にも耐えて生き続けます。受け取った際、ケルソスに手伝わせて弁論を吟味しましたが、あの方がまだご存命の折に読んだのです。細部に目を通すたびに私の興奮は高まり、ケルソスも同様でした。各部の技巧が見取れます。着想の新しい結び合わさった威厳・明瞭・優美、称賛への導入の仕方、優美な物言い。あなたの著作について一冊著そうかと思うほどです。読んでいるときも、読み終わって別れた後も、多くの考えが湧き起ってきて、夜の間も、あなたの弁論が心を離さず眠れなかったのです。」「高貴な方」とはユリアヌスのこと。この書簡はユリアヌスの死の直後のものと考えられる。残念ながら、このユリアヌスに捧げた称賛演説自体はテミス・テイオス「弁論集」には残されていない。頌辞が文人たちの間で読み回されていたことはたしかだが、個々の作品の内容に関して彼らがどのような感想を抱いたのかを伝える資料はほとんどない。

- ⑨ C. Ware, *Claudian and the Roman Epic Tradition*, Cambridge, 2012, pp. 44, 100. R. Flower, *op. cit.*, pp. 43-4, 48-9.

- ⑩ 「シンタクリシス（synthesis）」と呼ばれる技法である（Men. Rhet. 372.21-5, 376.31-377.9）。

- ⑪ Pan. Lat. X(2). 「ふたつ神聖なる皇帝陛下、あなた（マクシミアヌス）がアフリカヌスを、あなたをディオクレティアヌスが模倣したと

いうこの点で、お二人は今やスキピオよりも偉大なのです」(86)。「あのアレクサンドロス大王でさえ、自分の支配地をインドの王に戻してしまつたため、もう取るに足りないように私には思えるのです。

あれほど多くの「ゲルマン人の」王が陛下の庇護を受け、ゲンノボウデス「ゲルマン系部族の王」は陛下のおかげで自分の支配を取り戻し、陛下から贈り物を受け取ったのですから」(103)。「都ローマよ、今の皇帝陛下らのゆえにお前は幸福なのだ。今やロムルスとレムスの時代よりはるかに幸福であると言おう。というのもこの二人は、兄弟で双子であるのに、どちらが自分の名をお前にあてがうべきかと争つたし、互いが別の丘と指揮権を手にした。しかし今のお前の保護者たちは、お前をめぐって妬みから争うことがない」(131-2)。

- ⑫ Pan. Lat. VIII(4)113-4 「当時は、ブリタニアは海戦用の船で武装していなかったし、ローマ帝国もその時点で既にボエニ戦争とアジア戦争から、後に海賊の掃討戦やミトリダテス戦争によっても悩まされていたので、海軍同様陸軍の出動においても活力がありました。さらに他の点でも、当時その部族は経験がなく、敵としてはビクト族やヒベルニア人のような半裸であるような相手にしか慣れておらず、ローマの兵力と軍旗に容易に屈しました。カエサルも、オケアヌスを渡つたという、ほとんどその一歩だけを誇るだけでよしとせねばならなかったのです」。

- ⑬ Pan. Lat. XII(9)242-4 「軍規が秩序づけ忠誠誓約への責任感が鼓舞するローマ兵を、あるいは自分の生活の卑しきのために生を軽視するような野獣のごとき肉体しか持たぬ冷酷なフランク兵を、打ち破り捕らえることがどれほど困難であるか。それは、陛下（コンスタンティヌス一世）、先日イタリアにおいて、そして少し前に蛮族の地の光景の中であなたが為したことなのです。そうして、何の相違もなく、

あらゆる類の戦争と武器と敵が陛下一人に服従し、詩文が生み出したあらゆる歴史の武勇の記念碑も服従します。ですが、かつてのディクタトルやコンスル、そしてその後続く偉大な皇帝たちのかつての業績のみならず、神君たる陛下の父君（コンスタンティウス一世）の最近のいともすばらしい業績をも陛下は凌駕しました」。

- ¹⁴ Them. Or.3.33: 「かつてカミッルスは第二の建国者だと考えられていました。ガリア人の侵略を生き延びたものを守ったからです。ならば、今の時代、陛下（コンスタンティウス二世）はロムルスをも上回る建国者ではないでしょうか」。Them. Or.10.140ac: 「古の指導者たちのうち、ある者（マンミウス）はアカイア征服者と呼ばけられギリシアを荒廃させました。マケドニア征服者（メテッルス）は、マケドニアを空っぽで人住まぬ所にしました。高名なスキピオ（大）の孫たる偉大なるスキピオ（小）は、民衆と元老院からアフリカ征服者という添え名を得て、敗北し疲弊しきっていたカルタゴを土台まで破壊し視界から消し去ったのです。もし滅ぼした相手の名前から添え名を得たことで彼らが偉大だというなら、陛下（ウァレンス）は保護してやった相手の名前から添え名を得る点で、彼ら以上に偉大なのではないですか」。

- ¹⁵ Pan. Lat. XI(3).19.5. ロストラ (rostra) とは本来船嘴を意味するが、前三三八年アンティウムの海戦で捕獲した敵方の船嘴をローマ市のフォルムに飾ったことから、演壇のことをロストラと呼んだ。

- ¹⁶ Claud. De Bello Getico 124-53. 「デキウスの指揮と、いかなる過ちにも貫かれぬ、賄賂にも武器にも屈せぬファブリキウスの武勇の後、二度の損傷によって既に疲労していたビュッロスをクリウスが撃退した。ステイリコ一人によって成し遂げられた業績がいかにより偉大であるか、わかるうというもの。この方が服従させたのは強壮な種族、凶暴な熊座が雪多い地方で養う種族だ、エペイロスが育てるような

カーオネス族やモロッソイ族ではなく、予言のオークを無益にも誇るドローネの一团でもない。稲妻のごときポエニ人はどうか。まずファビウスがのり努力によって抑止し、次に大胆なマルケッルスが開けた平原で敗北を教え、三度目にしようやくスキピオの武勇がラティウムの海岸で退けた。だが、今回の外敵にいたっては、ステイリコ一人が策略をもって將軍三人分の務めを果たしたのだ。敵の憤激を遅延によって萎えさせ、その手で打ち負かし、敗者として追放した。しかもこれほどの功績が短期間に達成された」。

- ¹⁷ Synesius De Regno 20. シュネシオスはゴート族の兵士をローマ帝國軍から追放することを皇帝アルカディウスに求めている。ホメロスの引用は『オデュッセイア』第七歌四八七行より。
- ¹⁸ M. S. Williams, *Authorised Lives in Early Christian Biography: Between Eusebius and Augustine*, Cambridge, 2008.

- ¹⁹ R. Flower, *op. cit.*
- ²⁰ CIL VI.1710. Alan Cameron, *Claudian*, p. 404; C. Ware, *op. cit.*, pp. 1, 18を参照。

- ²¹ ウェルギリウス『アエネーイス』岡道男・高橋宏幸訳、西洋古典叢書、京都大学学術出版会、二〇〇一年、高橋宏幸による「解説」中の六三二頁参照。

- ²² C. Ware, *op. cit.*

- ²³ A. Wallace-Hadrill, 'The Golden Age and Sin in Augustan Ideology', in R. Osborne (ed.), *Studies in Ancient Greek and Roman Society*, Cambridge, 2004, p. 162.

- ²⁴ ウェルギリウス『アエネーイス』中、第六歌のアンキセースの啓示(VI.756-853)や第八歌のアエネアスの盾の描写(VIII.626-728)が、こうした英雄の系譜とアウグストゥスとの関連を強く想起させる箇所である。

②⑤ A. Wallace-Hadrill, op. cit. pp. 165, 168-72は、既に帝政初期の時点で、黄金時代の回帰という神話には、全ローマ人に皇帝の人格への従属を要請するというイデオロギー上の機能があったことを指摘している。

②⑥ 井上文則「天帝国統治と教養――官僚のみたローマ帝国」（南川高志編『知と学びのヨーロッパ史――人文・文学・人文主義の歴史的展開』ミネルヴァ書房、二〇〇七年、一二三―三五頁）。

む す び

最後に、ここまで述べてきたような文人たちの活動を後期ローマ帝国という時代背景の中に位置づけることで、結論に代えたい。「ムーサに仕える輩たち」の移動と交流はまさに全帝国規模に及ぶものであり、ローマ帝国の「学びのネットワーク」と呼ぶにふさわしいものである。しかし、強調しておかねばならないのは、このネットワークが後期ローマ帝国と密接に結びついていたことである。それは、知識人や学生たちの移動の安全がローマ帝国によって保障されていたというだけの次元にとどまらない。中央集権化が進み官僚機構が整備されつつある後期ローマでは、この新しい国家機構と密接に結びついた新しい貴族層が形成されつつあった。帝国の官僚組織の中でポストを得ることのできた人間が、この新しい帝国貴族層に入り上層身分として特権を与えられた。教養エリート層は潜在的にこうしたポストを埋める官僚予備軍であるため、彼らの移動と交流は後期ローマの体制によって促されたのである。加えて、こうして出現した新しい帝国貴族層は皇帝権力と結びついていた。帝政後期の国家機構は皇帝を頂点とするピラミッド型のヒエラルヒーを形成しており、この体制の中ではある人物の地位は皇帝との距離によって決定されるからである。エリートの地位は皇帝の権威と恩寵により強く依存することになる。教養エリート層もこの体制の中で地位を得ることによって社会的威信を維持・増進しようとする以上、帝政後期の帝国体制を結局は支えることになるといえよう。両者の関係は相互補完的なものである。

加えて、第二章で述べたとおり、当時の知識人は帝国の権力と対峙しそれを上手く操作することに関心を向けている。逆にいえば、対峙する相手であるローマ帝国の権威・権力が存在することは前提だったのであり、それを無視することは

できなかった。彼らの地位も帝国との関係によって規定されていたからである。むしろ、相手の権力が強力であるからこそ、それを御することが評価されるのではないだろうか。教養の力をもって帝国と対峙するという役割を果たすことで、彼らは帝国社会における自分の地位と威信を維持していたというべきであろう。「ムーサに仕える輩」としての矜持も、帝国という枠組みの中でこそ意味を有するものだったのだ。

全体的に見て、帝政後期の知識人はローマ帝国の存在を自明視していたといえる。特に皇帝に対する称賛の辞においては、ローマの再生と永遠に対する信念が繰り返し表明されている点が目立つ。あたかも何も変化が起きていないかのようには、言説の中のローマ帝国は遠い過去の栄光ある勝利と偉大なる指導者の下での再生を再現し続ける。そのため、自分たちの住む世界が矛盾や危機に直面しているといった意識は、四世紀の資料からは欠如しているのである。これ以後のローマ帝国がたどった運命を知っている後代の人間からすれば奇妙に思えるが、同時代の知識人の間に衰退や没落の可能性について真剣に考慮するような態度はまったくといってよいほど見られないことは強調してよい。これが彼らに危機感が本当に欠如していたことを示すのか、それとも危機感を表明すること自体を当時の教養文化が許さないのかは、判断が難しい。だが資料を読む限り、彼らの態度はおおむね楽観的であり、現状を肯定するような性格がきわめて強いと結論してよいように思われる。

「ムーサに仕える輩たち」のネットワークはローマ帝国中に広がる広大なものだった。そしてそれは、後期ローマ帝国の国家体制やイデオロギーと深く関連し、相互に支え合う性格のものであった。その反面、ローマ帝国の存在そのものが課す枠組みから抜け出ることにはきわめて困難だったと思われることも指摘しておかねばならない。彼らは、個々の政策や現状に不満を表明することこそあれ、自らもその内に取り込まれかつ再生産の過程に与っている帝国のイデオロギー自体は否定しない。残された量の多さにもかかわらず、帝政後期の文人たちの弁論や詩が既存の様式の反復を克服するような独創性や創造性に欠けているという印象を与える原因の一端は、この帝国体制との結びつきにあるのではないだろうか。後

期ローマ時代の「学びのネットワーク」は倦んだ世界の中にあつたのかもしれない。また、五世紀以後の歴史の経過を考えると、後期ローマの「学びのネットワーク」がローマ帝国の衰退や没落を阻止するのに役に立ったとは思われないし、根本的な変化を促すには「学びのネットワーク」自体が既存の帝国・皇帝体制と一体化しすぎていたというべきではないか。「学びのネットワーク」があるからといって、亡びが回避できるわけではないのである。たしかに後期ローマ帝国は何もかもが悪い方向に向かつていた国家ではない。だがそれは何の問題も抱えていなかったことを意味するのではない。帝国を支える仕組み自体がどのような作用を帝国にもたらすのか、検討する必要があるのではないだろうか。

（龍谷大学文学部非常勤講師）

'Fellow Servants of the Muses' in the Later Roman Empire:
Litterati and Empire

by

NISHIMURA Masahiro

This article deals with the relationship between literary culture and the Roman Empire in the fourth century in terms of the concept 'Networks of Learning'.

The late Roman elites enjoyed a common literary culture based upon love and veneration of the Muses fostered through a shared education in classical literature. Though a privileged minority group in the whole population, this educated class, called the 'fellow servants of the Muses' by Peter Brown in his *Power and Persuasion in Late Antiquity*, maintained a network of interactions and communications extending throughout the empire through which they moved, built careers as teachers and administrators and exchanged information and cooperated with each other through letter-writing. The later Roman Empire is characterised by the development of bureaucracy, and it was the literary elites who occupied the posts created in the later Roman bureaucracy. Because they moved throughout the empire in pursuit of these posts, the empire-wide itinerancy and interrelationship of educated elite was supported by the institutional development of the later empire and the prestige and benefits accrued from advancement within the bureaucratic organisation. Literary culture and networks of the educated class were sustained by and closely connected with the imperial system.

Literary culture in the later Roman Empire played an important role in confronting imperial power. As P. Brown pointed out in the above-mentioned book, the rhetorical education of the day was regarded as fostering self-restraint and decorum befitting of social elites, integrating local elites and imperial officials as educated men sharing the same cultural code and thus imposing restrictions on the exercise of imperial power. It was necessary for the smooth running of the vast empire to abide by a mode of behaviour moulded by literary culture that helped to earn the consent to govern and cooperation from local elites. Conversely, the sharing of culture

tied the educated elites to the later Roman Empire. The belief itself that education could control and manipulate imperial power constituted a part of the mechanism of government and the mentality of educated men was heavily influenced by the existence of the empire.

The close connection between literary culture and empire is also suggested from the image of emperor portrayed by men of letters in panegyrical literature. Delivery of an encomium for an emperor occupies an important place in later Roman political culture and the careers of literate elites. The description of emperors expressed in panegyrical sources has a remarkable feature. An emperor is compared with heroes and leaders who appeared in myth and history and is always depicted as equal with or even surpassing them. In this kind of narrative, an emperor is portrayed as the one who re-enacts the victory and glory of the past in the Roman world of the present. As a result, it generates a sense of continuity between the glorious past and the current Roman Empire. The emperor serves as the nodal point of the past and present for the empire, and thus the Roman Empire is considered restored to the 'golden age' and the prosperity it experienced in the past brought back. Such a discourse guarantees the existence of empire and the values of the educated class and creates unity and stability among those living within the empire. At the same time, on the ideological level, the role that the emperor must play and the mission the empire must fulfill assume greater importance. The later empire was a period which saw an intensification of concern and consciousness towards the imperial system. The *litterati*, while praising the imperial deeds and virtues, reproduced not only the values and the 'Networks of Learning' to which they belonged but also the power and authority of the Roman imperial system within whose framework they lived and acted.

The 'fellow servants of the Muses' were inextricably linked in a reciprocal relationship with the power and state structure of the empire in the fourth century. Therefore, the 'Networks of Learning' in the later Roman society has to be understood in the context of Roman imperial system and ideology. The attitudes of the literate class tended to be affirmative towards the empire, and the discourse of the sources in the fourth century is characterised by the absence of a sense of 'decline and fall'. The literary culture of the day took for granted that imperial authority would continue to exist and it participated in its reproduction. The network of educated men was as vast as the Mediterranean world, but its strong association with the imperial system made it impossible to diverge from the framework the

empire itself had set up.